

【JKギャルユキちゃんの耳舐めリフレクソロジー】

//タイトルコール

ユキ 「ぱちぱちぼいす」

ユキ 「ㄟギヤルユキちゃんの耳舐めリフレクソロジー」

//イントロダクション

ユキ 「あなたが耳舐めリフレクソロジーで指名したのはㄟギヤルのユキちゃん。」

ユキ 「積極的なユキちゃんの言葉攻めからの耳そうじと耳舐めに徐々に興奮へと導かれ、オプシヨンコースの手コキフェラで興奮度MAX射精。」

ユキ 「さらに禁断の特別サービス、ゴムなし生ハメえっちのフルコース。」

●トラック1

ユキ 「はい、ご指名ありがとうございます」

ユキ 「ヒーリングリフレ、『パステル』へようこそ」
♪

ユキ 「本日お相手させて頂きます、ユキです」

ユキ 「……なんて、固っ苦しい挨拶、いらないよね？」

ユキ 「お兄さんも、緊張してないで楽にしてよ。何か飲む？ お酒も一応あるけど」

ユキ 「なーにい？ お兄さん、もしかして緊張しちゃってるう？」

ユキ 「こういうお店は初めて？ へー、じゃあユキが初めて、もらっちゃうんだね」

ユキ 「にひひ……初めてがユキでいいの？」

ユキ 「……初めての相手が、ユキだったらあ……お兄さん、他の女の子じゃ……満足できなくなっちゃうかもよお……？」

ユキ 「なーんてね。ふふっ、そんなに怖がらなくてもいいって。もう、可愛いなあ」

ユキ 「えーっと、最初にね。お店のシステムについては、ちゃんと聞いてるかな？」

ユキ 「うんうん、ならよかった。初めてだと、結構戸惑っちゃったりするもんね」

ユキ 「ユキもね、初めて行く美容院なんかだと、お店によって結構システム違ったり……」

ユキ 「……なんて、男の人はそんな話聞いてても面白くないよね、あはは」

ユキ 「それじゃあ、最初にちよつとだけ、確認しちゃうね」

ユキ

「お店のシステムについては分かってもらってるかな？ 受付でちゃんと聞いてると思うけど……うん、なら良かった」

ユキ

「えっと、コースはイヤーマッサージ、オプション付き……」

ユキ

「わお、お兄さん、オプション付けてくれたんだ♪」

ユキ

「ありがとう♪ 今日頑張って、楽しませてあげるからね♪」

ユキ

「ってかさ、お兄さん真面目そうなのに、よくウチの店のオプションなんて知ってたね」

ユキ

「常連さんでも、一部の人しか知らないのにさー」

ユキ

「お兄さん、可愛い顔して、結構そういうの、好きなんだ？」

ユキ

「あっ、ううん。全然軽蔑なんてしてないよ。ユキは、自分をそういう風に見てもらえると嬉しいし……♪」

ユキ

「えー、お店のホムペでユキのこと見てから、色々調べてくれたんだ？」

ユキ 「そこまで熱心に思ってくれてるなら、期待は裏切れないなー。プレッシャーかもっ、ふふふっ」

ユキ 「そんじゃ、お荷物と上着預かるから……うん、お兄さんは、そのベッドに座っててね」

ユキ 「軽く準備しちゃうから、ちよっと待っててね」

ユキ 「ふふっ、もう我慢出来なさそうな顔してるう。でも、ね……」

ユキ 「焦らされた方が、あとでずっとずっと……気持ちよくなるよ……?」

ユキ 「んふ……あはは、なんだか嬉しいなあ、お兄さんにそんなに求められちゃうなんて」

ユキ 「うん、ユキ、やる気出てきた。今日はいっぱいいっぱい、お兄さんのこと楽しませてあげるから、ね……うふふ……」

●トラック2

ユキ 「んしょ……準備しゅーりよー」

ユキ 「お兄さんは大丈夫かな? んー、なんかムズムズしてる? もう、待ちきれない? ふふふ……」

ユキ 「よいしょっ」と

ユキ

「そんじゃ、早速始めちゃおっか？」

ユキ

「なあに？ いざ始めるとなったら、緊張してきちゃった？」

ユキ

「なにそれー、お兄さんちよっと可愛すぎじゃない、くふふっ」

ユキ

「ヘーキヘーキ、やってる内にリラックスするからさ、ほらほら、早く横になって？」

ユキ

「どこに……って、ユキの太ももの上、だよ？」

ユキ

「ふふっ、まーた顔赤くなった。お店に来るまでは積極的だったのに、根っこはウブなんだね」

ユキ

「大丈夫……ユキに任せて……」

ユキ

「すぐに、お兄さんのこと……心の底まで……安心させてあげるから……♪」

ユキ

「うんうん、なーんにも、恥ずかしがることなんて、ないんだよ……？」

ユキ

「ただユキに任せてくれるだけで、お兄さんは気持ちよくなれるんだから……全部、全部任せで、ね……ほらほら」

ユキ

「ユキの太ももの上……早く来て？」

ユキ

「ん、いい子いい子……♪」

ユキ

「ふにふに、ふにふに」

ユキ

「ふふ、お兄さんの耳、もう真っ赤になって、
すっごく熱くなってる」

ユキ

「それに、すっごく柔らかくて……なんか、子猫
ちゃんでも触ってるみたい、くすっ」

ユキ

「こんな立派な男の人なのに、こんなに可愛い
なっちゃんなんて、なんだか不思議だねえ」

ユキ

「ふん、ふん……ふにふに、ふにふに……ふふ、
なんだか触ってるの、楽し……ふふっ、なんだ
か、やめられなくなっちゃん……ん、ん……」

ユキ

「ん……触ってる内に、緊張もほぐれたかな？」

ユキ

「ならよかった。それじゃあ、続きもお……」

ユキ

「耳かきも、始めちゃって平気、かな……？」

ユキ

「うん、よかったあ。それじゃあ、耳かき、始め
させてもらうからね？」

ユキ

「あ、ちょっと待って……今、用意するから」

ユキ

「ん……ん……っしょと。あったあった」

ユキ

「ふふふっ……この、耳かきでえ……」

ユキ 「お兄さんの中、たくさん、気持ちよくしてあげるね……？」

ユキ 「ふふ、それじゃあ、始めるから……身体の力抜いてくださーい……」

ユキ 「中、入っちゃうからねえ……動いちゃ、ダメだよお……」

ユキ 「ん、ん……いい子いい子……ユキの言うことをちゃーんと守ってくれて、お兄さんはいい子だねえ……」

ユキ 「んー……んう……中、結構綺麗にしてるんだねえ……」

ユキ 「見た目もだけど、身体もちゃんと清潔にしてるんだねえ……えらいえらい……」

ユキ 「だけど、自分以外の手で……コリコリ……ってしてもらうと、気持ちいいでしょ？」

ユキ 「えへへ……ユキも、よく友達なんかと遊びでやったりするんだけど……」

ユキ 「女同士なのに、ガチで恋しちゃいそうになっちゃうの……ヤバイよね、耳かき……」

ユキ 「あ、変な勘違いしないでね、ユキはノーマル、ノーマルだから……!」

「っと、いけないいけない。敏感なところお掃除してるんだから、集中しなきゃね」

「ん……奥の方は、やっぱり自分じゃ出来ないから……少し溜まってるみたい……だね……」

「おっけ……そんじゃ、ユキが綺麗にしてあげるからあ……そのまま……動いちゃダメだよ……」

「ん、しょ……ん、んう……ん、はあ……んっ、んう……んんう……んっ、んっ……ん、は……ん、ん……んうう……」

「お……おう……やっぱ、溜まってるねえ……動かす度に、サクサク、サクサクっ……先っぽに伝わってくるう……」

「にひひ……お兄さん、どう……？ 気持ちいい？ って、聞かなくても分かるくらい、顔ふにやふにやじゃん、くすっ……」

「うん……上の方の小さいのも、このまま綺麗にするからね……はあ、ん、ふうう……」

「ん……ん……ふう、ん、ふう……んんう……んっ、んっ……ふっ、んっ……はあ、ん、はっ……」

「ふうう……ん、よし、とお……」

ユキ

「これでこっちのお耳は、綺麗になったね」

ユキ

「それじゃ、仕上げさせてもらうよ……次は、梵天を使うからね……」

ユキ

「とんとん、とんとん……」

ユキ

「こっちもねえ、気持ちいいよね。ちよつとくすぐったいんだけど、それがまた癖になる感じで……」

ユキ

「ちよつと、強めの方がいいよね。かるーくだと、むず痒くなっちゃうもんねえ……」

ユキ

「ふん、ふん……♪ ふふっ、ん、ん……こしょ、こしょ……んっ、ふふっ、んひひ……」

ユキ

「ううーん……うん。こっちはピカピカ、だね。うふふ、お兄さん、すっかり気持ちよさそうな顔しちゃってえ……」

ユキ

「ユキも、楽しかったよ……ホントこれ、男の人すーぐ虜になっちゃってさ、癖になっちゃいそ……」

ユキ

「ん……？ んふふ……そうだね、反対側はまだ、だもんねえ」

ユキ 「心配しないでも、いいよ……ふふっ、ちゃんと
してあげる……うん、したい、から……えへ
へ」

ユキ 「そんな……こっち向いて？ ほらほら、そう
しないと、反対側出来ないでしょ？」

ユキ 「まゝた恥ずかしがっちゃって……もお、本当に
可愛いんだからあ……」

ユキ 「そんなじゃあ、無理矢理……ごろん、ってして
あげちゃうからねえ……♪」

ユキ 「はい、ごろん……うふふ、お兄さん、全然抵
抗しなかったじゃん？」

ユキ 「もう抵抗出来ないくらい、とろんってし
ちゃってるのかな……えへへ、お兄さん、よわ
よわだね？」

ユキ 「片方の耳だけでそんなだなんて、こっちもされ
ちゃったら、どうなるかなあ？」

ユキ 「いひひ、ちょっと楽しみになってきちゃった……
……ふふ、今すぐに、しちゃうからねっ……」

ユキ 「それじゃあ、始めちゃうから、ね……ん、ん……
……んんう……」

ユキ 「うん、ほら……耳かき、中にい……入っていく
よお……」

ユキ 「お兄さんの身体、ゾクゾクって震えちゃってえ
……なんかやらしーねえ？」

ユキ 「女の子にお耳掃除されて……もしかして、感じ
ちゃってるんだあ……？」

ユキ 「うふふ……へ・ん・た・い、さん……♪」

ユキ 「なにい……悪口言われてるのに、お目々がま
た、とろろん、ってしてきちゃったね？」

ユキ 「言葉とお耳掃除だけで、そんなえっちな顔に
なっちゃうんだあ……ホントに変態さん……
♪」

ユキ 「もお……まだ始まったばかりなのに、こんな
になっちゃうお客さんなんて、初めてかも……
…」

ユキ 「やっぱり、お兄さんは思った通り……ユキの
ちよー好みのタイプだよ……うふふ……」

ユキ 「それじゃあ、こっちのお耳も……じっくりお掃
除してあげるからあ……」

ユキ 「むずむずぅってするの、たくさんたくさん、味
わってね……んふ、ん……」

ユキ 「ふう、んっ……んう、んっ……はあ、んふっ……んっ、はあ……んっ、んっ……」

ユキ 「もっと、奥も……コリコリ……って……してあげるから、ね……」

ユキ 「ふふっ……自分以外の手で……奥の方イジられるとお……なんだかむずむずしちゃうよね……」

ユキ 「それが、なんだか癖になっちゃうんだけどね……お兄さんも、そう思うよねえ……？」

ユキ 「ふふ、お返事聞かなくても、分かるよ……顔、もう真っ赤で……目もぽーん、ってしちゃってるもんね……」

ユキ 「うん、それじゃあ……奥の方、いっぱいイジってあげるね……んふ、ん……んんう……」

ユキ 「はあ、んっ……ふうう……んっ、んっ……どう、かな……お兄さん……気持ちいい……？うふふ……」

ユキ 「んっ、んっ……気持ちよくても、動いちゃダメ、だよお……危ない、からね……じっくり、味わって……はあ、ん、ふうう……んんう……」

ユキ

「ふう、ふう……くうう、うう、ん……うん、これで、キレイに……ん、なった、ね……んんう……」

ユキ

「もお……お兄さんが気持ちよさそうにしすぎだからあ……ユキまでドキドキしちゃったじゃん……♪」

ユキ

「お兄さんの反応、エロすぎい……うふふっ、ただ耳かきしてただけなのにねえ？」

ユキ

「そんじゃ、こっちも梵天で、仕上げてあげますね」

ユキ

「とんとん、とんとん……改めて見るとお……お兄さんのお耳、真っ赤だねえ……」

ユキ

「ユキも興奮しちゃったから、同じくらい真っ赤になってるかも……うふふ、ちよびつと恥ずかしいね……」

ユキ

「ふ、んっ、ん、んんう……んっ……うん、キレイになったよ、お兄さん……」

ユキ

「それじゃあ、仕上げ……にい……」

ユキ

「ふうう……」

ユキ

「ふふ、これ……ゾクゾクしちゃうよね……いいんだよ、もっと身体震わせてもお……」

ユキ 「それじゃあ、耳かきは、おしまいっ。楽しんで
もらえたかな、ユキのお耳掃除」

ユキ 「って、露骨に残念そうな顔してるし……」

ユキ 「大丈夫大丈夫……イヤーマッサージコースは、
ここからが本番……だから、ねっ♪」

●トラック3

ユキ 「それじゃあ、イヤーマッサージコースの、お楽
しみ……今から始めちゃうから、ね……」

ユキ 「お兄さん、トロトロになっちゃってるけど、立
てるかな？ うふふ……」

ユキ 「うん、そしたらさ……ユキに、身体預けてくれ
る、かな……？」

ユキ 「ちっちゃな子供みたくなっちゃったみたいにい
……ユキに、全部預けちゃっていいよお……
……？」

ユキ 「あはあ……素直だね、お兄さん……少しも恥ず
かしがったりしないんだあ……」

ユキ 「うん、ユキね……そんなお兄さん、好きだよ……
……あたしも、気持ちいいこと大好きだもん……
……」

ユキ 「早く、沢山気持ちよくなりたいもんね……いいよ、したげる……♪」

ユキ 「ぺろっ、れろお……」

ユキ 「んふふう……お兄さん、ビクッ、ってしちゃったねえ……」

ユキ 「まだ心の準備、出来てなかった？ それとも、耳かきで敏感になってるのかなあ……」

ユキ 「休憩、してもいいけど……ユキは、お耳でいっぱい感じてる、可愛いお兄さんが見たいなあ……♪」

ユキ 「ね、このまま……続けていい……？」

ユキ 「いいの？ やたっ、えへへっ……それじゃあ、始めちゃう、からね……」

ユキ 「まずはあ……この、真っ赤になった、耳たぶさん、からあ……」

ユキ 「ちゅっ、ん、んちゅっ……あむ、んむう……」

ユキ 「えへ……ちゅむ、ちゅっ……お兄さんのここ、充血して……ぷっくりしててえ……」

ユキ 「果物でも、食べちゃってるみたい……んんう……ぺろぺろ、たのしっ……」

ユキ 「んふう……ふうう……これだけじゃ、物足りないよね……ユキは、物足りないよ……」

ユキ 「はあん、んっ、ふっ……もっと、深いと」……中も、したげるから、ねっ……んんう……!」

ユキ 「お耳の、中……はあ、はあ……いっぱいペロペロ……してあげるからっ……はああ、んうっ……」

ユキ 「んじゅっ、ちゅう、んじゅっ……んれる、じゅっ、ちゅっ……んんう……んっ、じゅっ、ちゅううっ……」

ユキ 「はあ……んう、ふああ、んうう……お兄さんの、味、にいい……」

ユキ 「どーしてだろ、他の人で感じたことないくらい、あたし、ドキドキしちゃってるよお……」

ユキ 「はあ……はあ……お兄さんの身体、えっちすぎるよお……ユキ、こんなに興奮しちゃってる……」

ユキ 「ね、ね……すっごいドキドキしてるのお……背中から、伝わってくる、でしょ……」

ユキ 「えへっ、うふふ……おっぱいの奥から、ドクンドクン、ってお兄さんの背中にい……伝わるでしょ……」

ユキ 「ふう、んくっ……はあ、ああん……」ごめん
ねっ、我慢出来ないの……!」

ユキ 「もう片方の耳も、たくさん……味あわせてっ……
……んっ、んううっ……」

ユキ 「すーっ……すんすん……はあ、くうん……」

ユキ 「お兄さんの、すっかり興奮しきった、オトコの
人のおいしい……」

ユキ 「あは……嗅いでるだけ、で……ちよつと濡れて
きちゃったかもお……」

ユキ 「お兄さんのオスの匂い、でえ……ユキのおまん
こ、濡れちゃうよお……」

ユキ 「はあ、ん、ふううん……も、う……我慢なんて
出来ないよ……舐めちゃう、舐めちゃうから、
ねっ……」

ユキ 「んじゅるっ、じゅるる……ぢゅぱっ、ぢゅぢゅ
うううっ、んぢゅっ、ちゅっ……ふうん、ん
ちゅ、ちゅうう……!」

ユキ 「ぷああ……っ! はっ、あう……はあんっ……
ふーっ……ふうう……」

ユキ 「どうしてかな……あたし、すっ」い興奮し
ちゃってる……」

ユキ 「誰にでも、こんなことしてる訳じゃ、ないよ……」

ユキ 「えへ、えへへえ……身体の相性がいい、っていうのかなあ……」

ユキ 「なんだか、お兄さんとくっついてると……ユキ、どんどんエッチになっちゃってるみたい……」

ユキ 「ふふっ……お兄さんが、オプション付けておいてくれて、よかったなあ……」

ユキ 「だってあたし……耳舐めてるだけじゃ、満足出来なかったと思う、もん……」

ユキ 「ん、ふあ、ああん……お兄さんも、準備万端、みたい……だね？」

ユキ 「それじゃあ、このままあ……続けて、しちゃうか……？」

ユキ 「オプションコースのお……おちんちんマッサージ……しちゃう……からねっ……？」

●トラック4

ユキ 「んふう……ふう……ふうう……」

ユキ 「お兄さんのおちんちん、ズボンの中で、苦しそうにしてる、ね……うふふ……」

「はあ、んっ……ビクンビクン動いて、まだ服の中なのにい……ユキ、すっごいこーぶんしちゃうう……」

「あたし、も……我慢出来ないしい……お兄さんも苦しそうだから、脱がして……あげるから……ね……」

「えへへ……脱ぎ脱ぎ、しましうねえ……」

「ふう、ん……くうん……」

「ふあ、あ……」

「お兄さんのおちんちん、もう、こんなにおつきくなってるんだあ……」

「はあ、んう……もう、お汁がトロトロ出て……すっごいエッチな匂い……♪」

「お耳舐められてるだけで、そんなにおちんちん興奮しちゃってたんだね……」

「ん……お兄さんの割れ目からあ……お汁、もうドロドロお……」

「んふ、えへへ……指で、こっやってえ……ツンツン、ってしてるだけで……量、すっごいことになってるね……」

ユキ 「やっぱ、お兄さんの匂い、すっごい好きい……
もっと、もっとエッチなお汁の匂い、嗅ぎたい
よお……」

ユキ 「ね、ね……シコシコ、っていっぱいしてあげ
るからあ……エッチな匂い、いっぱい嗅がせて
欲しいなあ……」

ユキ 「んっ、ふ……こやってえ……搾るようにした
ら、いっぱい出して……くれるかな……」

ユキ 「はあ、んうう……熱い、ねっ……それに、すっ
ごいドキドキしてる……」

ユキ 「ほおらあ……我慢しないでいいんだよ……もっ
といっぱいお汁出して……ほらあ……」

ユキ 「シコシコ、シコシコ……♪ んふっ、おちんち
ん、どんどん充血してきて……すっごいエッチ
な形になってる……♪」

ユキ 「あはあ……ほら、もうお部屋の中……むわあ
っ、っってお兄さんのエッチな匂い、いっぱい
なってるう……」

ユキ 「こんなの嗅がされてて、まともでいられる女の
子なんて、いないよお……」

ユキ 「もう、ユキもお……おかしくなりそうなくら
い、興奮しちゃってるう……」

ユキ 「はあ、んっ……プリプリの、先っぽお……美味しそうに震えてて……我慢なんて、出来ないよお……」

ユキ 「ね、ね……おちんちん、ペロペロしても、いいよね……？」

ユキ 「お兄さんのおちんちんを、ユキの口の中でぐっぽり啜えてえ……」

ユキ 「唇で、ゴシゴシ抜きながら、じゅう、じゅうううっ、って、おちんちん吸い取っちゃうの……」

ユキ 「絶対気持ちいいよ……？ お口まんこでおちんちん扱かれて、お兄さんのせーえき、全部搾り取っちゃうの……」

ユキ 「うふふ、お兄さん、シコシコされてて、もう答えられないくらい気持ちいいのかな……」

ユキ 「でも、これもオプシヨンの内……だからね……答えてもらわなくても、しちゃう、からねっ……」

ユキ 「んふふ……そんなじゃ、いただきます……♪」

ユキ 「んんんう……んぐ、じゅぶぶ……」

ユキ 「ふう、んじゆる……お兄さんの……お口の中、
入っちゃったあ……」

ユキ 「んむ、ふあ、はあん……匂いも、すごかったけ
どお……お口で味わうと、ほんとこれ……おか
しくなりそお……」

ユキ 「んじゅっ、ちゅ……んれる、ちゅぷっ……
はあ、んはあ……」

ユキ 「口の中、お兄さんの味で、いっぱいになってえ
……意識、ぶっ飛んじやいそお……」

ユキ 「んううつ、んっ、んむ……れる、じゅっ、
ちゅっ……」

ユキ 「はあ、んふう……カリ首の、裏あ……ちよつと
しよっぱくてえ……」

ユキ 「エッチな味、たくさんしてくるう……れるれ
るっ……んふっ、ふううんっ……」

ユキ 「舌に、触れるとお……頭フラフラしちゃうくら
い、ピリピリしてくるう……ん、ふうう……」

ユキ 「や、はあん……お兄さん、腰……突き出し
ちゃってえ……」

ユキ 「ぶあ、はあ……先っぽだけじゃ、もどかしい、
かな……んふう、ふうう……」

ユキ 「もっと深く、啜えて欲しい……？ やあん……
そんなにおちんちんフリフリして、おねだりし
なくてもお……」

ユキ 「ユキが、もう我慢出来ないよお……」

ユキ 「お兄さんのおちんぽでえ……お口の中、犯され
るくらいに、乱暴にされたいってえ……思っ
ちゃってるう……♪」

ユキ 「はあ……はあ……いいよ……お兄さんも、気持
ちよかったら、腰、動かして……」

ユキ 「ユキの口まんこを、本物のおまんこ犯すみたい
にして、いっぱいおちんぽ出し入れて、いい
んだからねっ……♪」

ユキ 「んんっ、んんぶっ……!」

ユキ 「んむっ、んじゅるっ……! じゅっ、ちゅぶ
ぶっ、はむ、れちゅ、ぢゅるるっ……!」

ユキ 「はあ……はあ……あはあ……その調子だよ、お
兄さん……♪」

ユキ 「そうやって、男らしく、乱暴にい……ユキの口
まんこ、沢山犯して……♪」

ユキ 「んくっ、んじゅぶっ……んじゅるるるっ……
……!」

ユキ 「あたしも、たくさんチュツチュして、あげるからあ……」

ユキ 「舌、絡ませてえ……お兄さんのおちんぽ、先っぽから根本まで、全部ぺろぺろしちゃうからあ……」

ユキ 「好きなように、気持ちいいように……ユキのお口使って……沢山、射精して……いいんだから、ねっ……♪」

ユキ 「くふう、んむっ……んじゆるるるっ、ちゆるる……ぢゅぷ、ちゅっ……んんう、ちゅううつ、んぢゅっ……！」

ユキ 「れる、れるっ……ちゅううつっ……ちゅぱっ……！」

ユキ 「ぶああ……ん、はああ……おちんぽ、抜けちゃったあ……」

ユキ 「きゃふ、くうん……熱くて、ドロドロになったおちんぽ……ほっぺにスリスリしてるうう……」

ユキ 「んふ、んふう……ユキのよだれと、カウパー混じったくさあいお汁が、ほっぺ汚しちゃうう……♪」

「ふう……くうん……おちんちん、寂しそうにビクビク震えてるね……あはは……かわい……♪」

「あ、ん……タマタマ、すごいギュってなつてて、今、沢山精液作ってるんだねえ……」

「はむう、んっ……ぱくっ……んむ、れるう……」

「んふっ……れるれる……ちゅぶ……タマタマさん、がんばれえ♪」

「ユキのお口にビュービュー射精する、ドロドロ精液、たくさんたくさん作って、ね……んんう……」

「ちゅぶ、ちゅぶ……あむ、ちゅ……れるお……れる、れる……」

「はあ、んっ……えへ……ベロでタマタマ転がしてると……おちんぽが寂しそうに、つつん、って顔つついてくるね……」

「あううん……お兄さんってば、おちんぽもタマタマも可愛くてえ……」

「ユキ、どっちも弄りなくなっちゃう……くふふっ……」

ユキ 「ふう、ん……もお、おちんちん……限界、かな
……？」

ユキ 「うん……ユキ、もお……もう、お兄さんの精
液、飲みたくてえ……限界、かも……」

ユキ 「じゃあ……ラストスパート、だね……えへ……
…」

ユキ 「おちんぽ、壊れちゃうくらい……強くしゃぶっ
てあげるからあ……」

ユキ 「いつでも、好きな時、にい……ユキのお口の中
……射精して、ね……♪」

ユキ 「そ・れ・じゃ・あ……」

ユキ 「あーん、んむ……」

ユキ 「んんっ、んじゅっ、じゅっ、ちゅっ、んじゅる
るっ、んぢゅうっ、ぢゅうっっ！」「

ユキ 「んうっ、んんんゝゝゝっ！ んぶっ、ん
じゅっ、ちゅっ、じゅぞぞっ、じゅうう
うっ！」「

ユキ 「んんっ、んうっ、んっ、んっ、んっ！ じゅう
ううっ、んじゅううううっ！」「

ユキ 「ぶあっ！？ んっ、ぶづづづっ、んっ、んっ、
んむづづづっ！」

ユキ 「んっ、く、く、く……じゅる、ずぞぞっ
……んむっ、ぢゅるる、んぶっ、ぶああ……」

ユキ 「れるるるっ……じゅっ、ちゅづづ……く、く、
く……んっ、はあ……はああ……」

ユキ 「す、く……せーえき、こんな……まだ出てる、
よお……んじゅ、じゅるる……」

ユキ 「んん……んんう、んっ、はあ……はあ……」

ユキ 「えへへ……おにーさん、すごい量……だひた、
ね……」

ユキ 「多すぎて、飲みきれない、よお……ほら、見
てえ……」

ユキ 「えう……こんな、いっぱいだひやれ、ちゃっ
たあ……」

ユキ 「がんばって、のみこむ、からあ……ユキがせー
えき、くくくしゅる、とこお……」

ユキ 「よーく、みててね、にひひ……」

ユキ 「んぐ、んむ……く、く……んんう……じゅ
る、ん、く、くくんっ……」

ユキ 「えへ、えへへ……お兄さんの精液い……全部、飲んじゃったあ……」

ユキ 「普通のお客さんじゃ、こんなことまで、してあげないのにさー……」

ユキ 「ほんと、お兄さんといつちなこととして、ユキ、不思議なくらい……気持ちよくなっちゃったよお……」

ユキ 「えと、あの、あのさ……ホントに、普通だったら、オプシオン付けても、ここで終わり……なんだけどね？」

ユキ 「あう、えっと、ううう……お兄さんさえ、よければ……なんだけど……」

ユキ 「……最後まで、シチャう……？」

ユキ 「お兄さんには絶対迷惑かけないからあ……ね、お願い……？」

ユキ 「……いいの？ うん、そだよね……おちんぽ、まだまだ元気、だし……」

ユキ 「お口に一回出しただけじゃ、満足出来ないよね……ユキだって、そうだし……」

ユキ 「うふふ……それじゃあ、ユキの特別サービス……」

ユキ 「ゴムなし生ハメ、今からしちゃう……からねっ
♪」

●トラック5

ユキ 「はあ、ん……ふう、んうう……ユキ、もう……
こんなにフラフラしちゃってる……」

ユキ 「フェラ、してただけなのに……もう、身体、
すっごい熱くなっちゃって、ちょっと立つのも
辛いくらい……ふふ……」

ユキ 「ん、だいじょぶ……お兄さんは、そのままベッ
ドに、座ってて？」

ユキ 「んふふ、ちゃんと今から、ユキがパンツ脱ぐ
とこ、見てて欲しいから♪」

ユキ 「ふんふ、ん……♪ ほら、今下ろすから、よー
く見てて、ね……ふふふ……」

ユキ 「ふう、ん……スカートの中から、パンツが出て
きちゃいましたあ……」

ユキ 「くす、自分でも恥ずかしくなっちゃうくらい、
もうベトベトだねえ……」

ユキ 「このスカートの奥はあ……お兄さんのおちんぽ
ナメナメしてて興奮してえ……」

ユキ

「ドロドロになったおまんこが、早くお兄さんに挿れて欲しいより、って涙……うん、よだれ垂らしちゃってるの……♪」

ユキ

「くすっ、おちんぽ跳ねたね？ 想像して、興奮しちゃった？」

ユキ

「それじゃあ……ふふっ、ドロドロに蕩けたおまんこ、お兄さんに見せてあげるね……」

ユキ

「んんっ……くふ、ん……えへえ……すごいことになってるね、ここ……」

ユキ

「おちんぽ舐めてただけなのに、パンツ脱いだらあ……」

ユキ

「太ももが濡れちゃうくらい、エッチなお汁が垂れて来ちゃってるう……」

ユキ

「はあん……スースーするのと、お兄さんに見られてるっての、変な感じしてえ……」

ユキ

「まだ、なんにもしてないのに……おまんこの奥、なんだかドキドキしちゃうよお……」

ユキ

「んふ……えへへ……お兄さん、さっき出したばっかりなのに、お口でしてた時よりもっと大きくなってるみたい……」

「我慢出来ない……？　はあ、はあ……それは、ユキもおんなじだよお……」

「ふふっ、色気も何にもないユーワクでカッコ悪いけどお……お兄さんのおちんぽ、ユキのおまんこで、食べちゃっても……いい……？」

「……そんなの、言われなくてもって顔してるね……うん、そんじゃ……お兄さんのこと、食べちゃうからねえ……♪」

「それじゃあ……重かったらごめん、だけどお……ちよっと、失礼してえ……ん、しょ……」

「んふふ……お兄さんに、乗っかつちやったあ……♪」

「動かないで、ヘーキだからね……ユキが、このままおちんぽをお……中、に……挿れてあげるから……んん、ん……」

「あ、ん……先っぽ、があ……ユキのおまんこに当たってる、んうう……はあ、んっ、んっ……」

「この、ままあ……中に、挿れちゃうからねっ、んんっ、おまんこの中あ……挿れちゃうからねっ……！」

「くふう、んっ……んううう……！」

ユキ 「ひあ……はっ、くうう、はあ、あっ……はああ
……あんっ……」

ユキ 「これ、すっ」……♪ 少し入っただけなのに、
ユキ、おまんこビクビクうってしてえ……」

ユキ 「えへへ……軽く、イッちやったかもお……」

ユキ 「きやうんっ……あは……お兄さんも、すっこい
興奮してるみたいだね……」

ユキ 「くう、んっ……ユキの中で……どんどん大き
く、なってくるう……んあ、あっ……はあん…
……」

ユキ 「すっこいね、これ……おちんぽと、おまんこがピ
ツタリくつついちゃってえ……」

ユキ 「少し動くだけで、中のヒダヒダ刺激されちゃっ
てるう……」

ユキ 「こんなの、軽く動いただけで、何度もイッちや
いそお……」

ユキ 「やあん……ユキ、お兄さんのおちんぽで突かれ
たら、壊れちゃうかも……」

ユキ 「でも、いいよ……すっこい気持ちいいからあ…
……」

ユキ 「おちんぽ、でえ……ユキのこと、壊してえ……？」

ユキ 「きやううんっ！ きやふっ、んくっ……！
くうんっ、ああんっ！」

ユキ 「あっ、ひゃあんっ……お兄さんっ、いきなり激
しっ、ひやうっ、あっ、あっ！」

ユキ 「おちんちん、そんなに我慢出来なかったの？
ユキのお口にあんなにビュービュー出したの
に、もう我慢出来なくなっちゃったの？」

ユキ 「えっちちんぽ……エロちんぽ……ユキのちっ
ちなまんこ犯して、そんな興奮してるんだ……」

ユキ 「んひ、んっ、ユキの身体、がっちり掴んでえ……
…そんな、オナホ犯してるみたいにして、腰振
るお猿さんになっちゃうんだあ……？」

ユキ 「ねえ、ねえ……JKまんこ気持ちいい？ ハメ
てるのバレたら犯罪確実の、JKまんこそんな
に気持ちいいんだ？」

ユキ 「んひひい……いぢわる言ってるつもりなのに、
お兄さん、どんどん激しくなるねっ、んくっ、
んっ、はあっ、あっ……」

ユキ 「やっぱ、ユキい……お兄さんのこと、大好き……」

ユキ 「こんなにエロくて、あたしのおまんこにぴった
りなおちゃん持つてるだなんて、素敵すぎ
る、よお……♪」

ユキ 「くふうっ、んっ、あっ……きやうっ、んっ……
はあ、あっ、はあんっ……！ んあっ、あっ……
……ああんっ……！」

ユキ 「ひやうん……あっ、あっ……ユキい……ちよつ
と、腰、くうう……抜けちやいそお……かもお
……はああ……」

ユキ 「ん、あ……お兄さん、リードして、くれるの……」

ユキ 「えへへえ……男として、責められてばかりは
いられない……のかな……？」

ユキ 「ん、うん……それじゃあ、お兄さんにおまかせ、
します……」

ユキ 「くう、んっ……きやう、んっ、あう……」

ユキ 「はあ……はあ……お兄さんに、乗っかられ
ちゃったあ……」

ユキ 「えへへ……このカッコだと……なんだかお兄さんと恋人になっちゃったみたいで……なんだかドキドキしちゃう……」

ユキ 「はう……あんま、顔見ないで……ユキ、今ちょー変な顔になってるかも、だしい……」

ユキ 「うう……お互い様って言われたら、そうなんだけどさあ……」

ユキ 「それでも、ユキの顔見ながら、したいんだ……？　むう、お兄さん、ホントはエスなんじゃないのお……」

ユキ 「分かった……いいよ……ユキも、お兄さんの顔見ながら、したいし……」

ユキ 「お兄さんが、ユキのおまんこズコズコしながらあ……たくさん感じてる顔見ながら、したいな……♪」

ユキ 「んふふう……恥ずかしい、でしょ？　でも、顔逸しちゃ……嫌だからねっ……」

ユキ 「ん、うん……あたしの方はもうだいじょぶ、だから……このまま、突いて欲しいな……」

ユキ 「くうんっ、あっ、はっ……ああんっ、はっ、ああんっ……！」

ユキ 「お兄さんに動いてもらって、ずん、ずん、って
おまんこ突かれるの……これ、す」……」

ユキ 「ひやうっ、んくっ！ もっと……いいよっ、奥
までえ……ユキの一番深いところまでっ、ちん
ぽ突っ込んでえっ……！」

ユキ 「ひあっ、あっ！ ひゃんっ、んっ、んうう
うっ！ もっと、強く、強くうっ……！」

ユキ 「子宮、形っ、変わっちゃうくらいっ！ 強
く、突いてっ、もっと、もっとおっ！」

ユキ 「んいつ、あっ、あっ、はんっ、くううっ、んあ
あっ！ きゃふっ、くううんっ！」

ユキ 「ん、あっ……お、おふううっ……！ これ、
しゅごっ……おまんこの奥からあ……お腹っ、
突き上げられてるうっ！」

ユキ 「きゃふっ、んっ、くふっ、んふふっ……！ お
兄さんの、腰の動きに……合わせてえ……」

ユキ 「ユキの身体、持ち上げられちゃってるっ……♪
ほんとに、ユキのあそこ、お兄さんのちんぽ
扱くだけの穴になっちゃってるう♪」

ユキ 「こん、なのっ……オナホみたいに使われるの…
…ああ、んくっ、えへへ……本当は、苦しい
くらいなのにい……」

ユキ

「もう、おまんこ気持ちよくなりすぎちゃってえ……！ もっと乱暴に、好きなように使って欲しいってっ、ユキ、思っちゃってるっ！」

ユキ

「はあっ、んあっ、あっ、あっ、あああっ！ くあっ、はあんっ！ いいっ、いいよっ、お兄さんっ……！」

ユキ

「もっとズコズコ、ユキのおまんこ突いてえっ、好きなようにちんぽ刺激して、中にドロドロな精液、いっぱい出してっ！」

ユキ

「ほらっ、ほらあっ！ ちんぽブルブル震えて、もう精液昇って来てるよねっ、いいよっ、出してっ、欲しいのっ」

ユキ

「お兄さんのせーしっ、ほしっ、あっ、あっ！ グチヨグチヨになったおまんこにいつ、孕んじやうくらいこおいせーしっ、ドピュドピュしゃせーしてえっ！」

ユキ

「んいつ、あっ、くううっ、んひっ、や、きやんっ、ひゃああんっ、くあっ、うっ、あっ、はああっ、んいいいいっ！」

ユキ

「出るっ、出るよねっ、いいよっ、避妊とかどうでもいいっ、欲しいっユキのまんこっ、せーし欲しくてっ、切ないっ、切ないからあっ！」

ユキ 「残ってるせーしっ、全部出してっ！ お兄さんのせーえきっ、ユキのまんこっ、子宮に届くくらいしやせーしてえっ！」

ユキ 「やっ、あっ、あっ、あっ、あっ！ くううううううっ、んあああっ、あああっ、ああああああんっ！」

ユキ 「ひゅぎゅっ！？ んいっ、あっ、ああああっ、いきゅっ、んあっ、いくうううううううううっ！」

ユキ 「ふぐっ、あっ、かはっ、んいっ、あっ、あっ！ でりゅっ、んっ、あっ！ でて、りゅっ、んおおっ、おっ、くううううんっ！」

ユキ 「はひっ、んっ、はっ、はああんっ！ しやせーっ、とまんなっ、まだっ、でてっ、んくっ、おっ、おっ……イクうううっ、んいっ！」

ユキ 「ひぎ……ん、ぐっ、あああっ……はああ……ん、あ……あああっ……しやせー、とまんなっ、あっ、あっ……！」

ユキ 「まんこの中でっ、ちんぽビクビクしゅるとおっ……あひっ、またイクっ、んおっ……！」

ユキ 「中出しっ、しゃれるとっ……おっ、ほっ……イクの、とまんなっ……あああっ、んっ……あひ、ひいんっ……」

ユキ 「んくううう……はあ、はあ……あああ……ふーっ、ふーっ……んお、お……はあ、はあ、くうう、ふう……ふーっ……」

ユキ 「ん、あ……はああ……あああ……イクの、とまりやないのにい……おちんぽ、まだビュクビュクしてりゆう……はひ、ひいん……」

ユキ 「はあ……はあ……ふうう……んう、う……くうう……うううん……」

ユキ 「んきやつ……お兄さん、大丈夫……？」

ユキ 「あは……身体中、すっごい真っ赤にしちゃって……息も、あは……ほんと、マラソンでも走ったかって感じ……」

ユキ 「って、それはユキも同じ、かな……」

ユキ 「ふーっ……ふーっ……ほんと、こんなに夢中になるエッチなんて、初めてした……かもお……」

ユキ 「お兄さんの身体も、おちんぽさんも……えへへ、ホントに素敵、だったよ……♪」

ユキ

「んっ……きやうっ、ふっ……んくっ……」

ユキ

「はあ、ん……おちんぽさん、抜かれちゃったあ……ちよっと、寂しいなあ……なんてね♪」

ユキ

「うわ、まだかったあい……ユキの身体で、そんなに興奮してくれてたんだ、ね……」

ユキ

「じゃあ、特別のアフターサービス、だよ？」

ユキ

「んゝ……あむ、ちゅぶ……」

ユキ

「えへへえ、現役JKの、お掃除フェラサービス、してあげる、からね……んふふ、れる、ちゅっ……」

ユキ

「んん……お兄さんのおちんぽお……精液と、ユキのお汁でどっろどろお……はむう、んちゅ、ちゅ、ちゅっ……」

ユキ

「はあん……舐めてるだけで、またおまんこ疼いて来ちゃいそうなくらい、だよ……すっごいエッチおちんぽさん……♪」

ユキ

「あむ、れる、ちゅうう……れるる、ちゅっ……カリの裏もお……血管の一本一本もお……お汁でビショビショだねえ……」

ユキ 「れるるっ、じゅっ、ちゅっ……ユキのぺろぺろで、ぜーんぶ綺麗にしてあげますからねえ……んふふっ、ちゅっ……♪」

ユキ 「はむ、んっ、れるる、んっ、ああむ……んれる、ちゅっ、ちゅっ……れるれる……ん……れる、んちゅ……」

ユキ 「ふふ……このままずっと、お兄さんのおちんぽ、ペロペロしてたいな……♪」

ユキ 「ユキ、自分がこんなにエッチだなんて、初めて知ったかも……えへへえ……」

●エピソード

ユキ 「はい、お疲れ様」

ユキ 「お兄さん、ユキのサービスは、楽しんでもらえたかな？」

ユキ 「もてなす側のあたしが言うのもなんだけど……ユキは、すっごい楽しかったよ……♪」

ユキ 「えっ、エッチしたのは大丈夫か、だって？」

ユキ 「もう、そんな細かいこと気にしたら、お兄さん老けちゃうよ？ あはは」

ユキ 「あ、でもお……バレたら、ユキ……このお店に、いられなくなっちゃうかもお……？」

ユキ 「だけど、ね。ちゃんと常連さんがついてて、
しっかり稼いでたら、お店も強く言えないと思
うんだ」

ユキ 「だからね、お兄さん……これからも、このお店
に通ってくれるよね？」

ユキ 「ユキはお店辞めなくてもいいし、お兄さんは気
持ちいい思い出来るし、お互いウィンウィンだ
よね、あははっ」

ユキ 「えへへ……っていうのは建前でえ……ホントは
お兄さんと、もっともっと……」

ユキ 「えっちなこ・と、したいって、思っちゃってる
んだあ……」

ユキ 「うふふ、お店の外じゃ、危ないしい……ね、
ね、また、来てくれるよね？」

ユキ 「ユキ、お兄さんなしじゃダメな女の子になっ
ちゃったかもだし……ちゃんと責任、取って
欲しいな？」

ユキ 「ふふ、ごめんごめん、ちょっと脅迫っぽかった
ね、これ……てへへ……」

ユキ 「でも、また……お兄さんの気が向いた時でいい
からあ……また……」

ユキ

「ユキのおまんこお……沢山イジメに来て、ね…
…うふふ……♪」

//END